６－Ｎｏ．１６
令和６年 11 月 22 日
茨城県水産試験場

水　産　の　窓

イセエビ資源管理勉強会を開催しました

１ 開催趣旨

近年、茨城県ではイセエビの漁獲量が急増しています。国内のイセエビ資源は単一系群とされており、古くからイセエビ漁業が盛んな三重県等の先進県では禁漁期間の設定や水揚物の体長制限などが取り組まれていますが、茨城県をはじめとする近年になってイセエビの水揚量が急増している新興県においては、どのように資源管理していくか検討する必要性が生じています。

そこで、近年イセエビの資源量が増加している県や、今後資源量の増加が見込まれる県の試験研究機関が集まり、イセエビの試験研究や有効活用方法について専門家や先進県から取組内容について先進事例を学び、情報交換を行うという趣旨で、令和６年 11 月７日（木）に大洗町でイセエビ資源管理勉強会を開催しました。

２ 開催結果

写真：総合討論の様子

当日は専門家として東京大学大学院の山川准教授をお招きし、先進県として三重県水産研究所の方にリモートでご参加いただきました。山川准教授からは「イセエビの生活史と資源評価、資源管理」というタイトルで、国内のイセエビ資源全般に関わるお話をいただいた後、三重県水産研究所より、イセエビ漁業の現状と、現在取り組んでいる試験研究が紹介されました。新興県として、岩手県、宮城県、福島県の各公設試験研究機関の方々にご参加いただき、自県におけるイセエビ漁業の実態について発表いただきました。新興県の間でも漁獲量には大きな差があり、岩手県ではまだ見かけるようになった程度であるものの、茨城県では水揚量の急増に伴って重要種になってきているといったことが情報共有されました。

総合討論においては、現場に資源管理の取組を定着させていくための方法（シミュレーションによる予測）や、なぜイセエビが増えているのか（水温や黒潮大蛇行との関係など）などが議論されました。新興県においては、先進県に比べて漁獲物のサイズが大きい、漁期が水温の高い夏季（イセエビの産卵期にあたる）に限られるといった特徴があり、先進県の事例を学びつつ、新興県の特徴に則した資源管理を検討する必要があるなどの意見が出されました。

水産試験場では、引き続き資源管理に必要な情報収集、研究に努めてまいりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。